百々裏話（80）

おもてあきら

⊙『仙助座一件留』について（1）

江戸時代に四座一流によって演じられた能は、町入能・勧進能・法楽能などの稀なる例外を除くと、その鑑賞者は武士を主体とする上流階級に限られ、一般民衆は、広く普及していた謡などを通して能に深い関心を持っていても、容易には能に接し得なかったのである。こうした民衆の能への憧れを満たすものとして、江戸中期から盛んになったのが、いわゆる辻能である。能舞台に於いてではなく、人の集まる町中（寺社の境内など）で演じたことからの名称であろうし、演者は四座一流に属さぬ人々で、演出も種々の点で簡略であったらしいが、四座一流や歌舞伎の役者が脅威を感ずるほど盛行した時期もあったらしい。

辻能には種々の座があったが、代々堀井仙助を名乗る大夫に統率された一座が、宝暦頃からは辻能の代表的存在であった。この堀井仙助座の能―仙助能―については、辻能に関する江戸期の最良の史料である『翁草』がすでに言及しているし、松本亀松氏の「辻能辻狂言及びその役者（『能から歌舞伎へ』所収）や、近年の殿田良作氏「照葉能狂言史料―仙助・寿三郎・祐三郎―」（『密田良二教授退官記念論集』）にも考察があって、辻能の中では比較的研究が進んでいる方であるが、資料不足は如何ともし難く、仙助能の歴史の概要すら十分には把握されていなかったのである。

然るに、最近、仙助能についてのややまとまった史料の存在を知り得たので、その概要を紹介し、若干の考察をも加えてみたい。

平戸市の松浦史料博物館に、『仙助座一件留』と題する半紙本一冊が蔵されている。末尾に「安政二年乙卯十一月」と年記があり、表紙に「御薬舞方」と捺印した貼紙がある。平戸藩の薬舞方の役人が安政二年（一八五五）に編んだ書と認めてよいであろう。同年二月に平戸で仙助能の興行があり、喜多流から苦情が出たりしたため、仙助能について江戸・京都・大坂などに問い合わせ、平戸での見聞をも加えて一書にまとめたものである。その内容は、(イ)序的な記事、(ロ)堀井仙助からの聞書に基づく仙助座の由緒、(ハ)京都小川意斎老の仙助能覚え書、(ニ)喜多流地謡方池田平左衛門から藩役人や勧進元にあてた抗議の書状、(ホ)江戸駿台啓に問い合わせた答書、(ヘ)同人からの再書、(ト)大坂詰役人からの返答書、(チ)以上の諸書に基づく総括、(リ)追記（仙助座の由来やその芸風）などの各部分から成る。重要な部分は翻印しながら、順次紹介してゆこう。

まず(イ)は、冒頭に「仙助座の事」と題し「一、世に仙助座と唱ふる能役者の家あり。大夫を堀井仙助といふ。右の仙助、安政二年乙卯二月当地に来り、二月上旬より七郎宮社内におゐて数日の能あり、見物群集す。右の堀井の苗字、或ハ金森ともいひ、又伊藤といふ。氏も由緒ある由。大概を左に記す」とあるのみの短文。続く(ロ)には次の如くある。

仙助へ承候而書記候分

一、宝暦より前に仙助元祖三代御座候由。その時代京都に御吉事御座候砌、諸国勧進能御免有之、御書付等所持罷在候処、天明八年於京都誓願寺能興行之節、急火ニ而装束伝書等不残焼失いたし候。これに依て、前々之儀委敷相分り兼申候。

一、宝暦年中、江戸より服部鶴翁と申者大坂へ参り、船場久太郎町辺にて能指南いたし、夫より堀井仙助と改名いたし、勧進能所々にて興行いたし候由。（此者ハ江戸御役者にて候処、子細有て大坂へ参り候由。其子細は分明ならず。猶異説あり。奥に記す。）二代目ハ尼ケ崎産にて、先代の仙助門人にて、相続養子ニ相成候由。三代目ハ京都の林祐三郎と申者、二代目仙助の弟子にて、仙助と改名相続仕候由。此時分、美濃郡上産にて金森惣右衛門と申す者、大坂へ

参り、仙助と同座いたし、所々にて勧進能いたし候由。四代目仙助は惣右衛門実子にて相続いたし候由。五代目ハ大坂出生、幼名伊藤十蔵、其後仙助と相改、相続相勤、其後隠居仕、惣右衛門と相改候。六代目ハ加州産にて、伊藤甚作弥吉次郎と申者、大坂へ参り、五代目仙助弟子にて、其後仙助と改名相勤申候。隠居ハ惣右衛門と相改申候。七代目ハ惣右衛門実子にて、初名甚三郎、則当仙助にて御座候。本山と申苗字、四代目仙助之時代に御座候。且又日吉と申苗字ハ、是迄代々相伝り居、堺天下茶屋辺に住居仕候。

一、京都并大坂ニ而能興行之節ハ、願主より町御奉行所へ願出、御免之上相勤申候。

一、本舞台ニ而相勤候儀者、豊後船内八幡宮御祭礼肥後乙津御祭礼、能舞台ニ而相勤申候。

一、御領主御覧之所々、芸州御茶屋、肥後八代御茶屋ニ而御覧、勢州永井、豊後臼杵、同府内、右三ケ所ハ勧進能之場ニ而御覧ニ御座候。已上。此許勧進能之願主内野屋吉太郎より承候而書上之写。

右のうち、初代から七代までの芸系を記した条が最も重要であろう。初代仙助が服部鶴翁という江戸役者であったと言う点など、『翁草』の記事と合わず、信頼度に疑問はあるが、歴代の堀井仙助の関係をこれほど明記した史料はこれまで知られていない。勧進元を通しての間接的な形ではあるが、七代目からの聞書だけに、仙助能に関する基本的史料と言えよう。なお宝暦以前に元祖が三代あったと言うのは、『翁草』が仙助以前の辻能役者としている小林十右衛門らのことであろうか。

(八)は、平戸藩が京都御用達の栗林仁三郎に仙助能について問い合わせ、栗林は医師小川喜斎なる人物に聞い、喜斎が自己の見聞を返答したものである。喜斎は、信長・秀吉・家康に仕えた金森右近長近(飛弾高山城主)の家臣堀井仙助が、主君改易後に家康に願い出て諸国を廻って能を演じたのが初まりであるという説や、「堀井は宝生の由」などと述べたあと、主家の血脈断絶後に堀井が金森と苗字を改めたことに言及し以下次の如くに言う

天明年中主家の苗字金森を名乗て惣右衛門と称す。是愚老十二三歳の頃也。其余は皆々堀井を名乗て、堀井音次郎、同重三郎、同甚八、伊藤甚作等あり。惣右衛門ハ諸国にて年分五六十度道成寺を舞候事故、神沢其調子の翁草にも其名人なる事を誉給へり。我等も若年之心に惣右衛門ハ名人と覚へて、其外、音次郎の石橋、重三郎の釣狐・靱猿等、甚面白く覚申候。天明七未年の冬十月より明年正月廿九日迄寺町和泉式部境内ニ而大流行、則京都大火此所迄焼失仕候。其時分には、片山・野村・武田之能ハ一向ニはやり不申、漸一代に四五度石橋・道成寺舞候事ニ而、年分諸国ニ而一ケ年ニ五六十度舞候とハ格段之違ひニ相見申候。然るに、金森惣右衛門・堀井仙助・同重三郎死去後、近代之金森惣右衛門、浪華ニ而寛政中薗曲楽舞方秘事皆ひものと称する能を立札いたし、紫の幕を張て舞、又京都ニ而も関寺小町を右之通ニ而舞候。両所共見物群集仕候ニ付、京師之野村片山之能師、宜歎折柄ニ致し、関東へ下り四座の能方へ相届け、金森の能を指留申候事ニ御座候。関東にて神君御救免之儀ニ候得共、事長く候故之儀ニ御座候。乍レ併、此事三都斗にて、諸国にてはやはり以前之通之様子ニも相聞申候。此儀如何ニ候哉存不レ申、是迄ハ諸国ニ而随分諸侯方御覧も有レ之由承り申候。当時之金森、我等若年之時分之金森よりハ少し劣り候様奉レ存候。乍レ去随分名人ニ而有レ之候様存申候。右之義、御尋ニ付覚之儘奉ニ申上一候。已上喜斎答書之写

これによると、意斎は80歳近い古老らしいが、『翁草』をも参照しており、自己の見聞だけに拠っているのではない。明記していない部分にも同書の影響が認められる。家康の頃から堀井仙助が居たとの説は信じ難いが、飛弾高山の金森氏と結びつけているのは、(ロ)が金森惣右衛門を美濃郡上産とするのと

関係があろう。野村や片山らの能役者の妨害に言及している点も興味深い。（45・3・25）

▼見所の声▲

能楽堂の客席は
稽古場ではありません

能に親しみたい一市民として、銕仙会に期待するところ大であるがゆえに、本年度より会員となり、すでに3回参会致しましたが、そのたびに席を近くする人の傍若無人ともいえる、鑑賞マナーに閉口しております。学生席にて、鑑賞出来た以前は、周囲の鑑賞マナーのよさゆえに、心ゆくまで、幽玄にたゆとうことが多かっただけに、よけいそうなのです。小声で謡を口ずさんだり、手足で拍子をとったりといった、前々よりとりざたされている悪い所作が舞台に全感性をゆだねようとする者にとっていかにさし障りになるかを、知ったかぶりな愛好家に、声を大にして、新ためて訴えたい。この声が通じないようでは能楽堂とは、芸術としての発展の期待もむなしい、なれあいサロンなのでしょう。

（文京区　S・S）

《出演予定》

4月18日（日）名古屋観世会　融（銕之丞）
同　日　左近三十三回忌追善能（京都観世会館）　安宅（博太郎）
4月19・20・21日（月・火・水）桐朋学園演劇専攻科公演《三角帽子》（青年座ホール）観世静夫が演出を担当。
4月24日（土）大阪なにわ芸術祭（サンケイホール）江口（寿夫ッレ順之　礼三郎）
4月25日（日）左近三十三回忌追善能（京都観世会館）弱法師（慶次郎）
4月28日・29日（水・木）アキコ・カンダ第5回リサイタル　能の音によるモダン・ダンス《智恵子抄》（日比谷芸術座）観世寿夫が音楽を担当。
5月9日（日）小田原銕仙会（箱根塔之沢県立観光会館　班女（寿夫）　土蜘蛛入逆之伝（静夫　銕之丞　文義　照雄）
5月15日（土）左近三十三回忌追善能（大阪）鵜飼（真如之月（銕之丞）
5月22日（土）京都能楽鑑賞会（京都観世会館）道成寺（寿夫）

三月の当麻に使用した面は

前シテ―姥（洞白作）、ツレ―小面（作者未詳）、後シテ―増（是閑作）でした。

◆都合により「元雅の作品③」は休載します。

本号の執筆者紹介
おもて・あきら（表章）法政大学教授
杉森美代子（すぎもり・みよこ）東京学芸大学教授
徳江元正（とくえ・げんせい）国学院大学助教授

化学工業の
総合メーカー
電気化学工業
プラスチック・化学薬品
電炉品・肥料・セメント

各流
はかま
帯・袴
もちや〈薗部〉
千葉県市川市真間2の11の17
電話 〇四七三―二二・六八八